

<100年の難問はなぜ解けたのか>春日真人著・NHK出版を読んで。

場違いな本を読んだ、素人向けで解りやすいはずだが全く解らない、NHK出版ということなら恐らくTV番組で放送されたから見た人もいるはず、おもしろい番組だったのだろうと想像できる。この本を読んでオレは一番大事な数学の話が解からない、珍紛漢紛だけれどもその内容が面白く引き込まれ、一気に読んでしまったので紹介します。とはいえ解らないのはオレだけで、数学の専門家や学生には理解でき、常識で、基本的な事かも知れないね。「つまらぬことを興奮しておっしゃるな」と言われそうだ。

ポアンカレ予想を発表したのは、今を遡る1世紀前の1904年、ポアンカレ50歳の時、折しも当時のパリはアールヌーボーが街中を彩っていた。と書いてあるのを読めばオレもよく知っているヨーロッパのアールヌーボーの作品群、世紀末芸術、あの建築、あのガラス工芸、画家のクリムトやエゴンシーレが目につかぶ。

ポアンカレ予想とは。

「単連結な三次元閉多様体は、三次元球面と同想と言えるか」何のことだ、と解説が入る。

「ポアンカレ予想は、宇宙の形と構造に関係がある数学の問題です」

「長いロープを持って宇宙一周旅行出かけたと想像してください。その人物が旅を終え地球に戻ってきたとしましょう。その時宇宙に巡らせたロープを回収出来るでしょうか。もし必ずロープが回収できるとすれば宇宙は丸いと言えるはず、これがポアンカレ予想です」がはは！ですね。何のことやら。

単連結＝表面にロープをかけたら必ず回収できる。

三次元閉多様体＝四次元空間の表面

三次元球面＝丸い四次元空間の表面

「ロープをかけた時、必ず回収できる四次元空間の表面は、四次元球の表面と同じである」

と解説は続くが、オレには何も解らない。

このポアンカレ予想を解いたのはロシアのペレルマン博士。ノーベル賞よりも権威がある数学のフィールズ賞の授賞式会場で「賞はペレルマン博士に授与されます」発表した直後に「誠に残念ながらペレルマン博士は受賞を拒否されました」と会場にも姿を現さなかった。各報道機関は・・・

「ロシアの世捨て人が数学のノーベル賞を拒否した」

「貧乏数学者が100万ドルの賞を拒絶した」

何問中の難問ポアンカレ予想に挑戦して一生を捧げた人たちの話、数えきれない数の数学者たちがこの難問に、人生を翻弄された。これは数学の話ではなく人間の生き方の話、修業か、哲学思想か、それぞれの人の永い年月があったはず、失敗という現実よりも彼らが生き抜いた、自身を支えた、日々明日を見据えていたという事に喝采を送りたい。ただ彼らを見てみると、全く野に在る野人ではなく何らかの研究機関に属した学者たちのようだ。薄給かもしれないけれども、乞食（こつじき）の修行者ではない、メシは食えるのだとぼやきは蛇足かな。

ペレルマン博士は今全く姿を現さず、何処かで何かをしているそうだ。ロシア・サンペテルブルグ出身で両親は教育熱心なユダヤ系移民。かつての試験官の話では、少年時代はずば抜けた優秀さ、世話好きな明るい性格だった。彼の数学の答案の下書きを見て、たった3行で証明を終わらせている。豊かな想像力がシンプルで美しい解決方法を生み出している。

前回の本の中に二つのおもしろい話があった。話が数学の数学言語の事となると読んでいて解らない、珍紛漢紛ながらも「ええ、おもしろい」という部分場面がいくつか出てくる。大学勤務の小林先生が「宇宙物理をやっている奴等は純粹で子どものような人が多い。何時でも何処でも宇宙の夢の話を語っている。焦点がそこにしか向いていない」と言っていた。後書きのエピソードの一つですが「数学者の集まりは見た目ではと区別ができる。たとえば機械工学学会などでは、スーツにネクタイ着用、受け付けも体裁が整っている。物理学学会になると参加者の服装はもう少しラフで、ネクタイはしていないがジャケットぐらいは着ている。だが数学の学会ではネクタイはほとんど見かけない、教官でもまるで学生のようにジーンズ姿が珍しくない。京都大学の〇〇大数学者に会うということで緊張して待っていたらジーンズにリュックを背負って現れた。これを読んでオレも思い出すのが今は我々世代しか知らないけれど、奈良の商店街で、奈良女子大の岡潔先生が飯屋のショーケースを覗いているのを見た。古びた背広姿だったと思うが、トレードマークのレインシューズを履いていた。

オレ、毎日毎日絵を描きながら「上手くいかねえ、なんで、なんで」と遊んでいるが「置く！おくのだ、なげるな、こするな」と人には言っていないながら、オレの手は絵の具を迷いながら、筆で撫でている、擦っている、そんな自分を見て情けない無能だと罵りながらふとある日、その事に気づいてハレの日が訪れる、喜ばしい時だと舞い上がる。「解った、感じた、うまくいった、できた、できているはずだ」という手応え、やっときたハレの時。ただ残念な事にそう度々そんな喜びの時が簡単にはやってこないというか、いやそうではなくて物事を反対に考えて、日々の惰性の安逸、躁鬱、気の滅入り、悄愴と、おもわしくない言葉が次々出てくるが、何時の日か陽が射す明るさがあると思えば楽しいものだ。

さて数学の門外漢、珍紛漢紛のオレがこの本を読んで二つの数学の世界に興味を持った。この二つともポアンカレ予想を解く手がかりになるだろうと思われながらポアンカレ予想は解けなかったけれども、数学の世界の中にそれぞれ世界を作った研究らしい。らしいが続くが、解っていないのだからこうとしか言えない。

#### 1960年代の「トポロジー」

内容はとても解らないが考え方の突破口はおもしろい。七次元、六次元、五次元、四次元と問題が解けたなら三次元の宇宙の問題であるポアンカレ予想の解決は時間の問題という雰囲気だった。高次元の宇宙の問題、絡みが解けていったとか。スメール博士は言う。三次元の空間を縦横無尽に駆け巡るジェットコースターの地面に写る影はぶつかり絡み合っている。つまり三次元の世界でぶつかり絡み合ってもより高次元になればぶつからない。三次元空間の中でなかなかほどけなかったロープの絡みがより高次元、五次元や六次元の空間の中なら簡単にほどけてしまう事を数学的に証明した。

1980年代マジシャンのようなサーストーン博士があらわれる。

リンゴの皮を表面に沿って一周きれいに剥いて、それを紙の上に貼り付けたら、Cの形に開く。リンゴの表面に在った時はOの形に繋がっていた。これは曲率が正の形。

反り返った葉っぱの外側の輪郭をハサミでぐるりと切り、それを紙の上に貼り付けたら、交錯した。葉っぱの状態の時はOの形に繋がっていた。これは曲率が負の形。

博士の言葉。数学の本質とは世界をどういう視点で見るかという事に尽きます。数学的な考えを学べば日常は全く違って見えてきます。文字通り“見る”つまり網膜に映るという意味ではなく、学ぶ事によって見えてくるという意味。

二つ共、数学の式は解らないが、言っている事、差し示している事はオレが寝言で言っていることと変わらない、かな。

今回で3回目、余程オレはこのポアンカレ予想が気に入っている。そこでしみじみ考えて、「宇宙とは、宇宙って何だ、宇宙ってどんな形で大きさ」と問われれば、オレなりに答えてみう、言ってみようじゃないですか、どうせ素人の戯言、雑言でかたづけてくださって結構、まずは知っていることから。

地球の誕生から46億年、人の一生は精々100年足らず、文字が出来て5千年、石槍、弓で獣を追いかけて10万年、人らしいのが現れて500万年、知識をひけらかそうにも知っている事はこの程度までだが、オレが言いたい事は1年にしろ100万年にしろ、これは人間が作った約則であり規則であり、確かに星の回転が規則正しいから時間があるというのは事実だが、こちら側から見ているからそうであって、此处と違う場所から見れば違うものかもしれない。此处と違う場所とはそれこそ未知の世界、実在を否定している世界、そんな虚の世界があるかも知れない

地球の仲間、水・金・地・火・木・土・天・海・冥（冥、これは言わなくなったらしいけれど）の太陽系があり、太陽系と同じような仲間の群れが無数にあって、そのまた向こうに銀河があって、と言っているがこれが正しいかどうか少し不安だが、此处からそれらの星まで何万光年何億光年と距離があるという。先日の本の中に載っていたが、丸い球面の表面はたとえば地球の表面は緯度・経度の2つ、XとYでその場所を特定できる。丸い地球の中ならそれは、XとYとZの3つで特定できる。XYZで片付かないそれ以上のものが先日来問題になっている四次元、五次元、六・七と続くのだろうけれどもオレが解るのはXYZまで、それ以上は数学の先生には普通の世界だろうけれどもオレが語ればバカ話の世界になります。三次元にしろ五次元にしろ七次元にしろこれらは全て、基軸、原点を決めているのでは、人が勝手に此处を原点、この軸を基軸にと決めていないのかな。霊やら靈魂の話ではないけれども、向こうから見れば「勝手に、そんなもの、決めるな」とおっしゃるかもしれない。そんな世界からは人が決めたり、学んだりした条件は通用しない、向こうにはそんな条件が当てはまらないのでは。何億光年という距離、太陽系やらその仲間が何万何億年で動くリズムや時間、それと肝心なそれらを考える人の脳、それらが絶対に存在するのか、本当に在るのか、無いのではと考えたら、宇宙とは何もないのではないのかな。

宇宙とは、手のひらに乗るような大きさで、霞のような存在で、瞬時に消える。時間も空間も無い。

数学と言えば思い出すのが半世紀前の高校生時代、数学だけだけれども何度も100点満点の試験答案用紙を返してもらった。嫌味な話だけれども最初で最後の自慢だから我慢して聞いて。〇〇社の全国模擬試験でカノ国立大工学部には中くらいの順位の合格ラインだったが同級生にすごい奴等が居て、連中はもっさりした黒い学生服を着るとはいえ服はオレも同じ学生服だが、それこそ何を言っているのか解らない数学の議論を何時もしていた、連中には付いて行けないと常々思っていたが、一人は大学工学部の先生になったけれどもあとは別の道に行ったようだ。その一人が中年になった時「数学が結構好きで出来たので、京大の数学科に入ったら、イチローのような奴ばかり、オレが、オレが一番とすごい奴ばかり、すぐにここでは付いていけないとさっさと卒業して会社に入った、厚遇されて給料をいっぱいくれた、いい人生だった」と言っていた。ちょっとだけ数学の出来たオレ、「数学を解くのは、まず頭の中で道を見つけて、それに沿って解けばいい、感性の学問、センスの学問」と生意気な事を思っていた。

今は当時見たかもしれない、何時も書いていたかもしれない数学の式を見ても、そう言えば見た事があるなあ程度で全く忘れてしまった。

絵を描く事が、数学を解く連中の考え方進め方と似た処があるのでは、発想なり感性なりに似た処があるなと今回の本を読んで感じた。そういう意味でポアンカレ予想の本を読んで、いたく感激しおもしろかった。ただもう一度中学・高校ぐらいの数学の本を見たいとは思わない、忘れっぱなしでいい。

便利になった、世の中便利なものが出来たと思うものの中に宅急便がある。なんでもかんでも小荷物なら翌日に来る、ほとんどの日本全国どこからでも荷物がやってくる。「うちは田舎だからダメだ」という処もあるようだけれども、そういう処にお住まいの方はその分空気がきれい、自然がいっぱいと宅急便の便利さを諦めてください、と話は飛んだが・・・。

“ピンポン” “来た” 前日に仲間の大塚先生から電話

「明朝着くようにクール宅急便で今送ったよ、ちょっとだよ、ガシラだよ、シメ絞めてるから明日ぐらい、刺身に丁度食べごろ、ちょっとだよ」

ドアを開けると宅急便のあんちゃんが発砲スチロールの白い箱を両手で捧げてニコリ、オレもハンコを押してありがとうとニコリ、キッチンに運んだ。昨日電話があってから翌朝 9 時半に出かけなければならない事に気付いた、たまたま家族も全員留守のようで、「どうしようか」ピンポンの呼び鈴の横に「宅急便屋さん 2 時に帰る」とメモを書けば、そんな事したら泥棒氏が仕事をするかもしれない、何やかや思案をしていたが、朝の早い時間に来てくれて助かった。ガシラだ、新鮮な釣りたての魚だ、出かけるまで 30 分ある、出かけるまでに内臓を出しておこう、と箱を開けた。「ガシラだよ、ちょっとだよ」とは聞いていたが、赤い色、丸い目玉が飛び出ている、ピカピカ新鮮に輝いている、10 匹ほどだ、小さいのは拳骨ぐらい、大きいのは掌サイズ、氷の中ズラリと入っていた。これを刺身に、鱗はあるのかな、皆さんがやっているように写真を撮ろうとワンショット。袋の中にチュウブから押し出したような砂色、何だろうと思ったらウンコをお漏らしされている、すみませんねえ、これから食わせていただきますが、そう言えばガシラさん岩ゴロゴロの砂地の海岸にお住みなのだ、で呑み込んだ砂を吐き出しているのですねえ、餌は消化して砂だけをねえ。

展覧会前になると、画面が見えてくるというのか、わかってくるのか、絵の具のひと筆が上手くいく、すんなりキャンバスに吸い付く、ヘンな表現だが、上手くいく。普段から何時もこういうふうによくいけばいいのだけれどもといつも思う。今年は緑色の絵が多い。

少し絵の事でボヤキ節。

どうも最近世間の人々が絵に関心ない、絵を見ない、昔のように 20 歳代、30 歳代の若い人が絵を描かない、描かないから絵がわからない、わからないからますます絵を見ない、絵の善し悪しも好き嫌いもわからない、残念な時代だな。昔は音楽の方が元気が無いと思ったが、逆転している。とボヤキの続きは次回にでも。

夕方、さあ捌こうと冷蔵庫からガシラ君を出した。小さい奴のウロコは大変かなと思ったが、ウロコは無いのか見えないのか、へたくそな包丁さばきで大雑把な三枚下ろし、皮をはいで骨の処を省いて、半分か三分で旨そうな刺身が皿いっぱいになった。残った残骸を鍋に入れ、酒、味醂、砂糖、醤油で煮魚の出来上がり。アルコールは今日は日本酒を切らしているのでウイスキー。刺身と甘い煮魚、寒さの冬はホットウイスキー「旨い！」大塚先生に感謝。

人権の会議や会合に出席するようになっていつも思う事、そこでいつもいう事は「オレは“人権”という言葉自体が嫌い。なぜなら権利を振り回す、己の権利を全面に出す、自分の“我”を押し通す、というように自分の事ばかりじゃねえか、そのような自分の事ばかりをいっているのは良くないんじゃないの・・・」というのがオレの意見です。ただ皆さん考えてみてください、オレもそういいながら反対の事も思っているのです。今から30年前50年前だと思うのですが、当時の人々大きな声で人を指さして「部落だ、在日だ、沖縄だ、アイヌだ」という人が周りにたくさんいた、「ジジだババだ、頭が悪い奴だ、身体の悪い人にメクラだ、ビッコだ」と揶揄、罵倒も日常茶飯事だった。そんな差別悪態に対して「なにを言いやがるか、オレたちにも人間として幸せに生きる権利がある、財産も住む処もある、学校にも行く、結婚もする、子どももいる、そんな権利を主張して何が悪いか・・・」と声高に叫ばないと届かないし聞こえない、罵詈雑言に負けてしまう。「やつらはオレたちの事を平気で差別して罵る、でかい声で指さして言う、そんな奴らに勝つために大きな声で叫ばないと聞こえない、勝てない」という時代だったんだ、そうして人権、人権運動という言葉が生まれた。同じような頃アメリカの黒人差別はもっとひどかったと聞いている。黒人が乗ってはいけないバス、黒人が入ってはいけない建物、白人だけの上流社会、そんな中で日本人だけは白人待遇なんて幻想話も聞いた事があるが、今から考えれば何かを勘違いしていた阿呆な日本人としか言いようがないね。

20人足らずの人が集まった。時間が来たのでそれでは始めましょうと簡単に挨拶をして、まずは“バースデイチェーン”なるものをする。これは皆さんいいですけど、知らない老若男女が集まってさあ話をしましょうと言う時に、まず話の出来る雰囲気を作り、会場を和ませるのには最適ですぞ。どういう事かと申しますと、集まったみなさんに立ってもらって「今から無言で、正月生まれから年末生まれまで、誕生日の順番に並んでみてください。はい並びましたねというまでは、口を利かずに、指で合図するだけで、並んでみてください、誕生日の順番ですよ」と言っても「私は8月生まれだからこのへんかな」と呟く人や、右往左往する人や、意味がわからずきょとんとする人や、だけどその時点で皆さん気持ちが落ち着いてくる。並び終わったのち順番に大きな声で誕生日を言ってもらう、「へええ、感がよろしいですね」「1日違いなのセーフとはすごい」と上手く並んでいる方もあれば「聞いていませんでしたね」と、とんでもない処におられる方やで会場はどっと沸く、皆さんのぎこちなさは消えている。

今回はしなかったけれど、よくなされているのが自己紹介、と言っても名前を言って出身母体を言ってと堅苦しいものではなく、子どもの頃からの渾名とか愛称を言ってもらう、趣味の話、好きな食べ物の話を言ってもらう。

これも今回はしなかったけれども、愛称の名札をぶら下げ、「〇〇さあ〜ん」と“ふにやふにやボール”を投げかける。〇〇さんは次に「××さ〜ん」とそのボールを投げかける。「みなさん相手の目を見て気持ちを込めて」ボールが二巡三巡すると益々気持ちも身体も緊張もほぐれてくる、おじさんもおばさんも兄ちゃんも姉ちゃんも顔が綻んで、声も大きくなって、目が輝いてくる、昔から知っている遊び友達のようになってくる。

ワークショップ（参加体験型学習なのだそうだが）の集まり、会合は何かを使い、何かを作り、楽しみながら振り返り、話をする、話を聞く、そして自分の意見を言う、人の意見も聞く、それらを繰り返しているうちにどんどん気持ちが澄んでくる、気持ちが楽に楽しくなってくる、相手の人がわかってくる。そこには答えも結論も無い、正も悪もない。

目的の無い集まり、勝ち負けの無い人との付き合い、こんな何もない時間の経過がいいのだ。人は目的のために、勝つために、守るために、儲けるために、作るために、整理するために集まり話し合いその方法をその次の手を考える。だけれども何の目的も無く集まり話し合う、そんな無駄な時間を過ごすのもいいものだ、皆さんも一緒にやってみましょうよ。ただこのワークショップはテーマ・ルールが大事です。今回のテーマは、方言、習慣、マナーに由る勘違い、失敗、不思議だなというような話でした。ルールではないかもしれないけれど、普段から話さない人の話を上手

く聞きだす方法、話してもらう方法を開発しなければ。

展覧会 1 週間前になった。見せたい絵、見てもらいたい絵が揃ってきた。みなさん時間がありましたら見に来て下さいね。

13-020 展覧会 220313

66 歳春の展覧会、いよいよ明日搬入。今回はこのブログ文章が書けないぐらいに忙しい “てんやわんや” “バタバタ” の日々が続いた。余談だけれどもこの “てんやわんや” を広辞苑で調べると (「てんでん」各自勝手、オレも「てんでんばらばら」とよくいう。「わや」「わやく」無茶苦茶な意味、大阪弁で「わやや」という、これは「アカン」(無茶苦茶) かな) の 2 語合体の言葉、黄表紙時代とあるから相当昔からある言葉のようだ。ついでにバタバタも調べると擬音から来ているようだけれど、説明文に旧正月とか歌舞伎という言葉が出てくるのでこれまた古い、二つ共昔から正式に使われている言葉のようだ。

いつもの個展は 1 年前、半年前に描いた絵を選んで 10 点 20 点と並べ「よし、これとこれを出品しよう」と決めていたが、今回は違った。展覧会の日程が決まっていつものように 10 点 20 点と並べ「よし、これとこれを出品しよう」と決めたまではよかったが、もう少しいい絵を、もう少し絵を描きこもうと色気が出て、潰した、消した、その上から描いた、白いキャンバスから新しい物まで描いた、これでよかった、いい絵ができた、最高にいいものができた、オレはオレを持ち上げたぞと秘かに悦に入っているのだが、幻で終わらず本当にいいものあって欲しい。こ難しい事を述べておりますが、なんとなく、今までと違っていい絵が描けたぞと思っているのですが・・・。

個展の搬入はいつも一人でします。アトリエに並んだ絵を自分の車に積み込んで運転し画廊まで行く。画廊に着けば絵を降ろし床に並べる。だいたいこんなものだ、この感じだ、この雰囲気だと、床に並んだ絵を壁に掛けていく。画廊の壁の正面は此処でここにはこの絵が目立つ「いい感じだ、いやよくないな、この壁にはこの手の絵があう」なんて考えつつ並べていく。そのほかに看板、案内状、挨拶文、絵の解説メモ、値段表、お菓子にお茶、いろいろ要る。仲間や知人にいろいろなタイプの絵描きがあり、オレのように一人で何でもしてしまう奴、人呼んで器用貧乏者、仲間が手伝って何でもしてもらっている奴、こいつはひよっとすると大物かも知れない。資金まで出してもらっている奴、アーティストの中には世の中に対して甘えん坊が意外と多い。自分は何もせず配偶者が何から何までする奴、甲斐性が無いのに何時も威張っているがこの手合いは案外小者かも。オレも何時までもひとりでできない、周りの人にもっと手伝ってもらうように普段からその方々をお願いしなければ。

そうそう聞いて下さい、チラシを作りました。A4 サイズ両面に絵を 10 点、襤褸君なる figure の写真も小さく入れた。画集が高くて無理なら 1 枚の紙の両面に印刷をし、これを 10 枚ほど作ってホルダーに入れミニ画集にしようと思っている。チラシを作ろうと思っていたがなかなかスタートできずやっと腰を上げたのが二十日ぐらい前、まずレイアウトのデザインを、絵は描き終わったら写真撮影はしているのがどれを選ぶか、文章はどうするか、それやこれやをずっと迷っていたが尻に火が付けば考えるのも面倒とばかり、パツパツと絵を並べ、下地の色を緑にしてプリントアウトした。「緑よりグレーがいいのでは」という娘の意見に渋々従って出してみるとなるほどグレーもいい。オレの絵は日付けをナンバーにしているので数字を書き、その数字の読み方の解説、我がロゴ、2 行ぐらいのコメント、原稿を作るのに丸一日はたっぴりとかかった。印刷屋に注文した、今回は初めて色校正をしようと印刷屋の店に行った。行ってよかった、その印刷屋は値段が滅法安い、原稿も校正も注文者任せ、印刷をするだけ、完全な版下しか受け付けない、修正も構成も注文者がする、その印刷屋では一切データは触らないシステム。注文者であるオレがイラストレーターで原稿を作りそれを WEB で入稿する。その注文の折、有料で色校正を送って欲しいというボタンを押す、そのプリントアウトしたものをオレが見て、色が渋いとか、もう少し明るくとかを向こうに言うのではなく、自分で

自分のパソコンのデータを修正して、それをもう一度WEBで入稿する。二度目の校正をするなら又有料で申し込む。今回は時間が無かったので1回ですませたが、本当にいい色が欲しければ2回3回色校正をした方がいいかもしれない。こんな事を書くとプロのデザイナーが見て「お前ら素人が・・・」と笑われるかもしれないが、素人でも画集ぐらい作れるとはたいしたものだ、というより便利な世の中になったものだ。しっかりした紙で両面カラー、1000部6500円也。今日はバドミントンの最後の練習日だったけれども忙しくて行けなかった。

13-021 展覧会-II 240313

来廊御礼

遠い処、私の展覧会に来ていただきましてありがとうございます。

この会場での展覧会は3年目です。画廊オーナーのお人柄にあまえ、自由にのびのび此処を使わせてもらっています。ゆったりした空間、おいしいコーヒーを楽しんで下さい。

私は66歳になり「いやあ、ジジイだなあ・・・」と普段の立ち居振る舞いが少々覚束なく、サッと立ち上がれない、靴を履くのに壁で身体を支えている、話をしているも言葉が出てこない忘れっぽい、話の内容が要旨が狂っているかなと思ひ当たる事が時々出てきます。これが判っているうちはおかしいかなといううちはまだまだとも言いますが、何かにつけて昔とは心身ともに違う、衰えたと感じるようになりました。とは言え仲間にはまだフルマラソンをヘロヘロになりながらも完走した奴とか、素人楽団に入りオーケストラの一員として楽器を奏でている奴がいます。私も、始めたばかりのバドミントン、人生の半分は楽しんだ山歩きをもう少し楽しもうと思っています。

絵はなかなか上手くなりません、いい絵が完成しません、いつも言っていたのですが、先日来、「上手く」も「いい絵」も「完成」も棄ててしまおう忘れてしまおうとしています。これからのオレの人生「食う」「寝る」「走る」「描く」これだけでいい、これでいこうと決めたら、「上手く」も「いい絵」も「完成」もなんだか馬鹿馬鹿しくなって、自然体で生きていこうと思います。岡村隆久 2013 3/25~3/30 シェスタ倶楽部

とはいえこの自然体、案外難しく大変かもしれませんね。とにかく皆様これからも仲良くお付き合いください、これが一番嬉しい事かなと思っています。

#### ●わたしはわたし

この絵が出来あがった時は嬉しかった。「どうもうまくいかん、アカンね・・・」という時間が永く続いた。もう一度やり直そうと全部を消した。いつもは白色を全部に塗るのだけれど白色に黒色を混ぜて塗った。その上からおもいきり描いた。できた。これはいいかも、これだったのかもしれない。

#### ●パイロット

明るさにさらけ出された自分も人も物もそれらが自分のものになる、それは内である。太陽が沈み死の世界、闇の世界が始まる。今のようにスイッチをひねると灯りがつく文明社会はいく分差し引くとしても、暗闇の中、かすかに見えるもの、見えないものを、己の想像、妄想が遠ざける、外になってしまう。

#### ●風景

橋の絵です。雪解け水がごうごうと渦巻く山の谷筋の流れに架かった板だけの橋。向こうには山が聳える。最初見た時もこのあと何回か見た時も気にいっている。

図版は去年の展覧会です。

展覧会二日目 26 日の朝 7 時「飯橋が亡くなりました」「・・・」大ショック！「月、水、金の 3 回行く、手伝う」「手伝うと言っても何もできないので、絵描いてる」「何人か人を展覧会に呼んでるし・・・」26 日朝 8 時に顔を見に行った。夜も 8 時に顔を見に行った。飯橋先生の話は次回。

展覧会 3 日目、絶え間なく人が来てくれる、ありがたい。

- わたしはわたし：おもしろい事を考えている。「宇宙の形とは」と問われたら手のひらに乗るカスミのような物、すぐにはじけて消えてしまう。人なんて、それこそ小さいそれこそ一瞬。ならば、オレ、どう生きる。
- らっぱふくひと：金色のラッパ。デカイ口から、ぼー ぼー ぴゃー ぴゃー、音が出る。身体を揺らし、足踏みをして、身体をそらす、いい音だ。
- たいこをたたけ：彼女は踊るように身体をくねらせ 右手を 左手を 震わす 触る 撫でる 叩く 叩く 音が翔ぶ 身体が揺れる 脳が痺れる
- ピアノひくひと：黒光りするデッカイ箱が、音を紡ぐ、音を吐き出す、音を奏でる。
- わたしはわたし：これは顔を描いた絵です。この顔が話し、笑い、泣き、叫びます。あすも、あさっても。
- わたしはわたし：今回の展覧会、緑色を使った絵が多い。自分の中でこの 1 年、色の流行あり、不思議な話ですが緑色をよく使った。その色に魅入られている、その色を使うと次の手が上手くゆく、次もまた緑色を出している。というのは建前で本音は緑色の絵の具が余っているのだ・・・がはは、なんてザレてみたい。
- わたしはわたし：「へのへのもへの」と顔の絵を描いた思い出がおありでしょう。そんな幼稚な事をオレは今もしています。この絵は「へのへのもへの」です。
- たいこをたたけ：若い演奏者が、ぱかぱか ぽこぽこ 敲く 身体じゅうにリズムがあふれる まわりを 音の粒が飛び交っている
- サイクリングヤロー：すすむ 前に向って 前に向って 走る 前に向って なにもないと わかっているのだけれど これが行って しまうんだよなあ
- ピアノひくひと：すこし前に描いた絵に手を入れた。その頃は赤い色を使っていた。赤はいい。そのうちまた赤色をたくさん使いだすだろう。
- セロを弾く人：ポアポア ギーコギーコ その後はきれいな音が次から次に 弓が弦をこする セロが鳴る
- わたしはわたし：絵の具は、絵の具を作っている会社に依って、少しずつ色が違う、呼び名が違う事もある。今絵の具箱に緑色は 4 色ある。混色はあまりしない、色が濁るから。分厚く塗るとその色が前面に出る。薄く塗ると下の色が滲み出る。
- わたしはわたし：ええい くそお と おもいきって 塗り潰して その上から描いた
- サイクリングヤロー：マチエールとは絵の肌、キャンバスに絵の具がどういう風にくっ付いているか、デコボコ感か、サラット感か。昔からこの絵のように、デコボコに絵の具を塗るのが好きでした。サラットした絵も描きたいと思いつつ、描きこんでデコボコにもしてしまう。というように左右に揺れています。

余談ですが、辞書でマチエールの下にマチネーと有って「昼間の性交」とある。日本では 24 時間この言葉に変わりがないふしぎな表現だと思いつつ調べた。演劇の公演は普通は夜だけれども昼間の公演をマチネーいうようだ。

図版は、檻樓君 開田高原 ph 中西市蔵